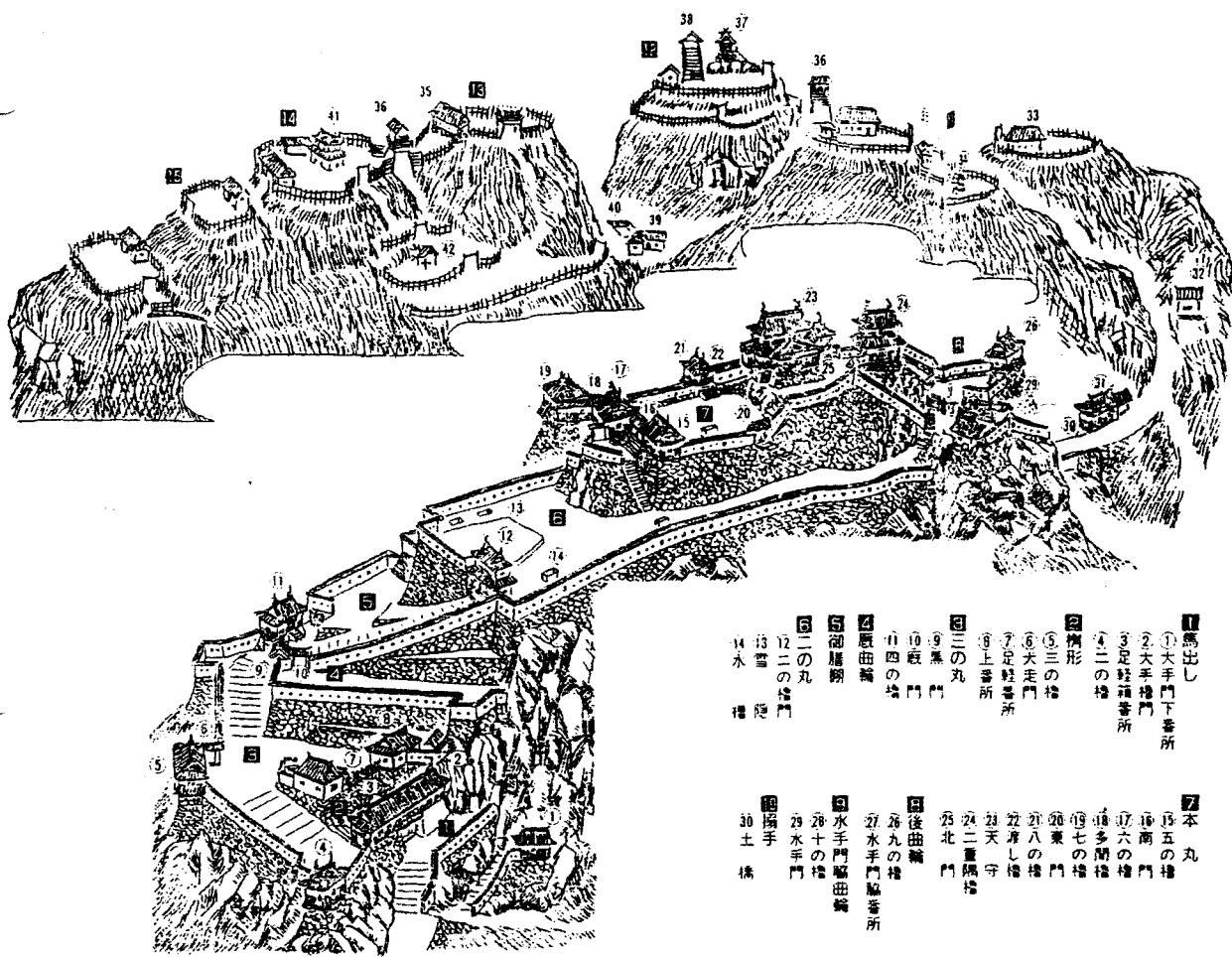


備中制覇の象徴 松山城に登る

大松山天神丸相畑木戸 復古想像図 中世式

原 福吉氏作製



- | | | |
|---------|---------|---------|
| ①馬出し | ⑦本丸 | ⑪番所 |
| ②大手門下番所 | ⑧五の櫓 | ⑫東井戸 |
| ③足輕番所 | ⑨南門 | ⑬相畑木戸 |
| ④二の櫓 | ⑩六の櫓 | ⑭やぐら |
| ⑤三の櫓 | ⑪七の櫓 | ⑮萬やぐら |
| ⑥大走門 | ⑫東門 | ⑯相畑丸 |
| ⑦足輕番所 | ⑬八の櫓 | ⑰天神社 |
| ⑧上番所 | ⑭天守 | ⑱星井 |
| ⑨三の丸 | ⑮二重櫓 | ⑲天神丸 |
| ⑩無門 | ⑯北門 | ⑳番所 |
| ⑪四の櫓 | ⑰後曲輪 | ㉑大松山城主丸 |
| ⑫四の櫓 | ⑱九の櫓 | ㉒一の丸 |
| ⑬二の丸 | ㉑水手門脇曲輪 | ㉓三の丸 |
| ⑭二の櫓 | ㉒十の櫓 | ㉔井戸 |
| ⑮雪隠 | ㉓水手門 | |
| ⑯水 | ㉔隔手 | |
| | ㉕土橋 | |

松山城復古図 近世式 江戸末期

平成11年 3月14日 (日)
備陽史探訪の会 城郭研究部会
講師 出内博都・坂本敏夫

備中を支配した松山城主

延応二年（一二四〇）より明治二年（一八六九）まで六二九年間、十四家三九代の城主が一応連続している、

☆. 秋庭氏五代

秋庭三郎重信（相模国三浦一族，承久の乱後有漢郷の地頭，延応二年大松山に築城）－又四郎信村－平六重連－小三郎義繼－三郎重知（元弘頃．約九二年

☆. 高橋氏（二代）

高橋九郎左衛門宗康（城主交替のわけ，出自もあまり明らかでない，藤原行成＝三筆の四男兼範の後裔備後三吉の一族と伝える）「備中府志」に「大松山に高橋九郎左衛門，小松山に大五郎とて，当国の守護職たり」とあり，城地を小松山まで拡張したらしい（六波羅の軍奉行として太平記巻三．巻六にでる）元弘三年五月九日近江国番場宿蓮華寺にて自害した。

蓮華寺過去帳（群書類従）

「高橋三河守時英四十一歳．同孫四郎業時三十四歳．同又四郎範時十九歳．同五郎盛時二十一歳．同孫四郎左衛門元時十七歳」

以後一族が各地に名を残しているが，残存一族は窪屋郡流山の城に移った。

☆高氏と後期秋庭氏五代

正平十年（一三五五）高師泰の孫「師秀」が城主になったが，若年のため管領細川頼之の計らいとして，補佐役として守護代に秋庭重明をあてた。

（高氏の系譜）

天武天皇－高階真人峯緒－九代略－惟真（高新五郎）－五代略－高橋門師重

└師泰（繼符）－師世－師秀（隠符）

└師直（隠符）－師友．師冬．師夏

△当時の情勢（太平記巻二九「越後守石見より引返す事」にある上杉朝定との「備中勢山合戦」にはじまる「観応の擾乱」のなかで観応二年（一三五五）二月二六日，師泰．師直師世等一族自害，師秀は二歳であったと伝える（観応元年．足利直冬九州没落，三年二月二六日直義殺害）

△太平記（理尽抄）「備中松山の城は当国の要城たればとて、細川頼之兵糧を沢山に用意し、高越後守師秀を籠置きたり。執事に秋庭三郎というもの、主の師秀生得不器にして愚なりければ、是非について僻事多かりき。秋庭諫言するといえども是を用いず、結局秋庭を討たんとする企て色にみえければ云々」

△正平十七年六月三日「諸国宮方蜂起事」山名伊豆守時氏五千余騎にて美作進入、山名師義備前、備中進出。備中国人は讃岐出陣中．．．秋庭の決断．．

「秋庭三郎多年拵すまして、水も兵糧も卓散なる松山の城へ、多治目・櫛崎を引き入れさかば、当国の守護越後守師秀戦うべき様無くして、備前の徳倉の城へ引き退く時、郎従赤木父子二人落ち止まりて、思う程戦って遂に討死してけり」（七年の在城）

☆秋庭氏五代（七代説もある、高梁市誌は五代説をとる、在城約一四六年）

初代 秋庭三郎重明（守護代としての実力．．吉備津宮南随神門棟札、宝妙寺開基．．文和元年孖歳、俗名秋庭肥後守平重明、貞治元年（一三六二）城主。至徳元年（一三八四）没一同八郎頼重（応永廿一年＝一四一四没）一同平之充頼次（正長元年＝一四二八没）一同備中守元明、嘉吉元年赤松満祐、將軍義教を殺しければ急ぎ誅戮有るべしとて、八月秋庭備中守元明諸将とともに赤松と播州蟹坂に戦い、尋いで白旗の城を囲んで功有り、細川右京大夫勝元の臣として在京が多く、応仁の乱前の混乱の中で、勝元の使者として動いている。大内政弘の上洛軍と戦っている（応仁別記等）この乱中摂津国の守護代も兼ねている、引退後有漢にかえり、永正六年（一五〇九）没一同備中守元重 管領細川政元の重臣として在京が多いが、留守を守る継明、継重、平成重、同重隆の協力によって領国は安定した（文明十九年將軍義尚の六角征伐に参加）

大内義興上洛、細川氏の分裂等により戦国の様相が深まるころ、秋庭氏の時代は終わっただけで、没年不明「鹿苑日録」に元重は京都に住み年齢九〇歳を越えた天文十二年頃の風貌の一端が記されている。

☆上野氏二代（約二十一年）

上野氏についても史料が乏しい「姓氏家系大辞典」によれば足利氏族で三河

国碧海郡上野よりいず。「尊卑分脈」に足利泰氏－義弁（上野律師）．．．

松山城初代を民部大輔信孝とも兵部少輔頼久ともある，信孝は將軍義植近臣で義植の流浪に従い大内義興に使者として会う。永正五年義植復帰後，備中下原郷鬼邑山城に在城，その後，子頼久が松山城主となった。信孝は幕府奉行衆として將軍義輝が，毛利元就父子に入洛を促した奉行として奉書を残しており，義輝から元就への御内書にも

連々忠節いたすべき由，言上の条，褒美として相伴衆に召し加え候。

弥粉骨ぬきんずべき事肝要に候。委細は聖護院門跡演説有るべく候。

猶信孝申すべく候。

十二月八日

（義 輝）謹

毛利陸奥とのへ

頼久の業績として「安国寺」の中興，再建がある，大永元年（一五二一）八月十六日没。これ以後「天忠山安国頼久寺」と改称した。

頼久に次いでその子伊豆守頼氏が城主となった。大内氏に属したが，天文二年尼子を背景とする猿掛城主庄為資に滅ぼされる。

☆庄氏二代（約四十年）

庄氏は武蔵七党（平氏）の一派で庄権守藤原広高－太郎家長（草壁荘の地頭として入国，猿掛城を築き，横谷の御土井に居館を作る）－五代略－資房（左衛門四郎，幸山城を築く，元弘の乱で六波羅軍に属し京都で戦死）－五代略－元資（駿河守，猿掛城主，横谷洞松寺に墓と寄進状がある，相国寺領川辺庄において守護細川氏と守護代庄氏の戦い＝蔭涼軒日録，延徳三年十一月二日，備後衆参加）－為資（備中守，松山城占拠）－高資（備中守，三村，毛利連合軍に敗れる＝元龜二年，1571）

△庄氏が尼子を背景に活動している間に，成羽の三村家親が毛利の幕下として羽翼をのばす－尼子より吉田左京亮義辰を松山城に加番，300余名でよく支える－永禄4年（1561）家親，香川光景の援をえて城を包囲－糧食つきて逃亡，離散（西郷修理亮の重傷と吉田の最期）

△永禄9年家親暗殺さる一同10年元親，明善寺弔合戦に敗北一同12年毛利三村連合軍斎田城（植木秀長）を攻めて大敗－毛利元清来援－落城（高資死亡）永禄3年（？）兵部少輔勝資を初め備中の諸将尼子方に見方し国中の小城を攻落し国中に於ける勢益々熾となる，毛利の幕下鳴輪の三村修理進家親（？）この有様を察し，毛利に援兵を乞う輝元即ち叔父元清を大将として之を援く，三村即ち不意に松山に押寄す，時に城主高資は子勝資に軍勢を付して竹庄へ遣わしたる留守にて，只小姓当番の兵士四・五十人ばかり出合いけれども，九牛が一毛なれば東口より乗り入る，高資討死すれば一人も残らずなりにけり（中国太平記）

これが一つの転機となり，備中における毛利の勢力は抜くべからざるものになり，三村は備中の中心勢力となった。

☆三村氏の悲劇（家親の野望と尼子との対決）

三村系譜も確たるものはない，諸書を勘案して次のようにまとめる（高瀬誠）

(1)清和源氏新羅三郎義光を遠祖とし小笠原を名乗る(2)13世小三郎長時のとき常陸国三村郷に住み三村姓をなのり，新左衛門親時のとき信州に移る(3)元弘の初め孫二郎能実のとき備中国小田郡星田村（美星町）に移り，建武2年8月11日足利直義の命によって地頭職になり土豪としての勢力を貯えた。

天竜寺雑掌申す。備中成羽庄，本主三村信濃入道余類居り当庄に住せしむ動成その煩い云々，おおく謂うなし，早くその妨を止めらるべし，若し承引せざる者，罪科に処すため注進なさるべし，依って仰せ執達件の如し。

明德四年十月七日

左衛門佐 花押（管領斯波義将）

細川兵部大輔殿（頼 政）

（天竜寺文書）

信濃入道は盛親のことで，三村の備北への進出の一端がうかがえる(4)天文二年，庄為資松山城攻撃（上野在城）三村家親（盛親の孫）為資と連絡し，宿願であった成羽を攻略し鶴首城に居をうつす(5)為資，松山入城以後次第に対立。△猿掛城の攻防．．備中守護の変動（細川－大内－尼子）天文7～8年頃尼子が一応備中を制す。天文9～10年吉田郡山合戦以降尼子の勢力下り坂になり

、毛利に通ずる者も現れた（家親はその代表）天文20年猿掛城将穂田実近が後月郡頂見山（三村所領）に侵入、庄＝尼子、三村＝毛利の対立ができる。

（18年9月神辺落城、21年7月滝山落城）家親からの援軍依頼（隠狀程）

家親一人御味方に参り候なば、備後備中の国人共は三箇年の中には、ことごとく御手に属し候いなんず、先ず自分の敵にて候穂田を攻亡し候わば、細川、石川、伊勢の一族ど共はやがて降人と成るべき間此旨御許容あって、早く援兵を賜り候え。

天文22年（1553）2月元就父子3人吉田出発、15日元就、隆元出部、井原に着陣、元春猿賭着陣、家親先陣してたたかうも三村方敗れる（元春矢掛に留まる）同年4月再び開戦（元春のみ留まる）。．庄、三村和睦（長男元祐を穂田の養子として、猿掛城に入れる）△毛利勢力の伸長、尼子の頽勢、高資の疑念。．吉田義辰の加番。．吉田と高資のあつれき。．高資猿賭に帰る。永禄4年（1561）3月香川光景援軍して吉田を敗る（前出）△家親の作州進出と悲業の死。．永禄9年（1566）2月久米郡穂村の興禅寺で遠藤兄弟の兇弾に斃れるまでの数年間、山陰戦線と作州作戦に席の暖まる暇はなかった△悲運の元親。．同10年春上道郡沢田村（岡山市）の明禅寺山城の弔い合戦（明禅寺崩れ）三村22000人、宇喜多5000余人、調略で金光、須々木、中島等内通し三村大敗、△斎田の合戦。．永禄11年、直家9千余騎で備中侵入く毛利九州出陣の留守をねらう、山中鹿之介鋒起、藤井皓玄反乱、庄高資人質を出し宇喜多に属す筑前より吉川、小早川帰国、元清備中に発向、伊勢氏、小田氏を従え猿掛に迫り宇喜多兵を追い、三村元親、穂田実近らと共に上房郡斎田城（植木秀長）を囲む、宇喜多1万余騎で後詰、毛利大敗す、しかしその後、何らかの条件で庄、植木の一族を帰属させたい。△松山落城と庄氏の滅亡。．元龜元年（1570）山中、出雲に侵入輝元、元春、隆景出陣、2月鹿之介を敗って富田城の囲いをとく、6月元就病状悪化輝元、隆景芸州にかえる、尼子、宇喜多連合軍備中侵入幸山城（石川左衛門）を降す、斎田城（植木氏）を囲む、穂田元資援軍に行くも戦死、植木、庄高資再度尼子に降る、

三村毛利に援軍を乞う△元龜2年2月，元清8千を率いて出陣，松山城を落とす，高資戦死し庄氏滅ぶ「．．時に城主高資は子勝資に軍勢を付して竹庄（上房郡賀陽町）へ遣わしたる留守にて只小姓当番の兵士四，五十人ばかり出合いけれども九牛が一毛なれば東口より乗り入る，高資討死すれば一人も残らずなりにけり＝中国太平記）

☆三村氏1代（5年） 成羽城主三村修理進元親松山城主（元龜2年2月18日＝元清感状） （元龜2年6月16日＝1571元就逝去）

△元清先鋒で再度斎田城を囲む，宇喜多直家後詰で毛利軍敗退（9月4日），続いて輝元，隆景も出陣．．松山，猿掛を中心に毛利勢力拡大によって，宇喜多備前に退き庄，植木等出雲に走る．元親，斎田城管理

☆元親，織田に内通．．△幕府，毛利，大友の和睦を図り，元龜2年4月久我晴豊，聖護院道澄を派遣．．毛利と宇喜多，浦上の和睦も勧める（元龜3年10月29日和平成立）

☆信長の介入と三村の離反

今般足利義昭，中国毛利輝元憑，当家可亡之風聞為明白，貴辺廻謀於戰被勵者，本領之上備後一国可宛行者也，若有相違者，大小之神祇弓矢八幡，

疑有間鋪事，依神文如件 天正二年八月五日（1574年）

△三村の苦悩と対応．．一族会議において鶴首城主三村親成，嫡子親宣反対して諫言し，分裂し親成父子10月7日賀陽郡経山城（中島大炊助）へ逃げる，

☆毛利軍の松山攻略作戦

天正2年11月10日，隆景を総大将に8万の軍勢が出動，△隆景は高松城主清水宗治に誓書を出す△作州月田山城（櫛崎元兼）に木原左馬充を監視に派遣，笠岡山城で作戦会議（潤11月20日）△三村方の防衛配備

松山城	1700余騎	有漢常山城	新山家佳
小松山	三村元親	斎田城	三村左京
大松山	三村親重 同親当	新見 杠城	三村元範 3000
三本松	三村親氏	手庄国吉城	三村政親 300余

左内丸	親友	河上孫九郎	成羽鶴首城	三村 左馬充	200
天神丸	石川久式		山田鬼身城	上田実親	3000
美袋大渡城	三村忠秀	300	秦の荒平城	河西之秀	300
野山城	野山宮内輔	300	幸山城	石川の嫡代友野、江口等	
竹庄矢倉城	中村直重	100	畠法雲山城	三村貞親	
全庄田山城	中村掃部助	100	猿掛城	三村 兵衛	300余

△毛利方 輝元 小田布陣(岩屋山、尾敷山、竜山に配備)、親成、中島の案内で宍戸先鋒

12/20~23 篠原城落城 斎田城落城、12/27~1/1 国吉城落城 鶴首城落城、12/下 法雲山城落城。(1月中頃輝元本陣を篠原に移す)。1/5 紅城落城、1/19 荒平城落城、1/20 美袋城落城、1/23~29 鬼身城落城。(2/28 鬼身城を修復し本陣とし、輝元入城) △松山城攻撃戦 3/1 隆景、諸將成羽集結... 広瀬園屋へ三村軍進出... 3/16 河内谷へ敵前上陸... 迂回して青後の鶴見山(585m)を占領、上からの攻撃で松山軍退去。△小盆地伝いの迂回作戦をとらざるを得なかった(大久保-岩井坂-下谷-上谷-岸へ激戦数刻... 毛利軍戦死者数百人)△元親一部精鋭を残して全員箠城-数日後御根小屋の戦い(宍戸1万の軍で総攻撃... 激戦数時... 御小屋に放火して青後の馬酔木丸(下太鼓丸)へ引き上げる。付近大火になり頼久寺も焼く。戦場は山城へと移る。小勢を奮って山に上った毛利軍、不案内の為城兵に前後を断たれ敗走し死者多数でた。この時中山島大次郎の奇襲によって芸州軍敗れる。城兵夜襲により糧食等奪われる)

△三村方残兵のゲリラ戦(防衛第2線のあった岩を中心に、芸州兵の手薄について夜討をかけ、その都度取った首が、落城時に3318に及び内山下の惣門に懸け集めた)

☆攻城軍の作戦転換と落城=長期包囲作戦による人心離反①近郷の麦薙、挑戦にも応戦せず②4/27隆景、成羽に帰る③長陣の準備(築地、飯城、馬場の構築)...

城内の兵の気のゆるみもでる④百姓の動静変化⑤刑部報恩寺の清水法印による内部工作(元親を退治した時は、永年芸州へ忠節を尽くした三村の一類、譜代であるから、内応すれば後援家をもたてさせ、身の安全を保障して立ち退かせる... 頼みの綱の織田の援軍は陣内... 内応の動き)⑥5/20天神丸における竹井直定、河原直久等による天神丸占拠と石川久式の妻子捕虜⑦大松山に動員をかけたが、三村左馬充、左内丸の兵部蒸、三本松の日名徳重など手切の矢を本丸へ射込み離反その他、数百名も離反... 元親、久式相畑より天神丸を火攻めにす。

☆元親の最期 5/20馬酔木丸、勢箠力壇に降伏勧誘の矢文、5/21を疑って一同本丸に逃げ込む(午後6時“犬も地をかい潜り、鳥も羽をつくろふ事ができない程堅固な二丸も、今は此の本丸一つを懸

すのみでその運命も窮まり、城中で最後の宴が催された”)△元親の切腹をめぐるの、家臣の動き．．切腹とりやめ再起を期す。△5／22 闇の中数百丈もある北面の断崖を脱出、

“元親大石あたって壁につきたまえば、そのまま気を失い罵い息をもせずして伏し馬えば一歳付き随う者二十人計り、彼より敵の追い来ると心得、落ちゆく間路を幸いに、元親は早息絶えぬと見及びつつ、散り散りにこそ成りにける”舞の弥介、児阿弥他6人助ける．．

△自分の刀が抜けて“右の膝を斬り、素足の左踵を一字に踏みきって一步も歩けなくなった．．(分散)．．△5／23(辰の時=8時)弥介一人となる(阿部山まで逃げる)

5／26 弥介城に進入討死した(元親 後飯坂)6／1高梁川を渡り頼久寺に入る(切腹思い留まる)、松蓮寺に行く6／2通行の樵人を頼んで、切腹を城中に連絡．．

検使として桂民部大輔、天野五郎右衛門〔湯浴、飲食、儀式、辞世、消息、自害=22歳〕首は輶に送る、墓は頼久寺、一子勝法師丸(8歳)斬られる。

☆毛利氏の上洛基地松山城 備中武将配置

松山城 城代天野五郎右衛門 鬼身城 穴戸隆家 国吉城 吉川元春城番 今田山城守

桂 民部大輔 幸山城 小早川隆景 城番 国司老成守 加番 中島大炊助

鶴首城 三村親成 高松城 清水宗治 経山城 中島大炊助

冠山城 禰屋定勝 日畑城 日畑景親 伊与部山城 明石兵部少輔

神戸山城 小田高清 馬鞍山城 小田孫兵衛 笠岡山城 村上武吉

猿掛山城 毛利元清

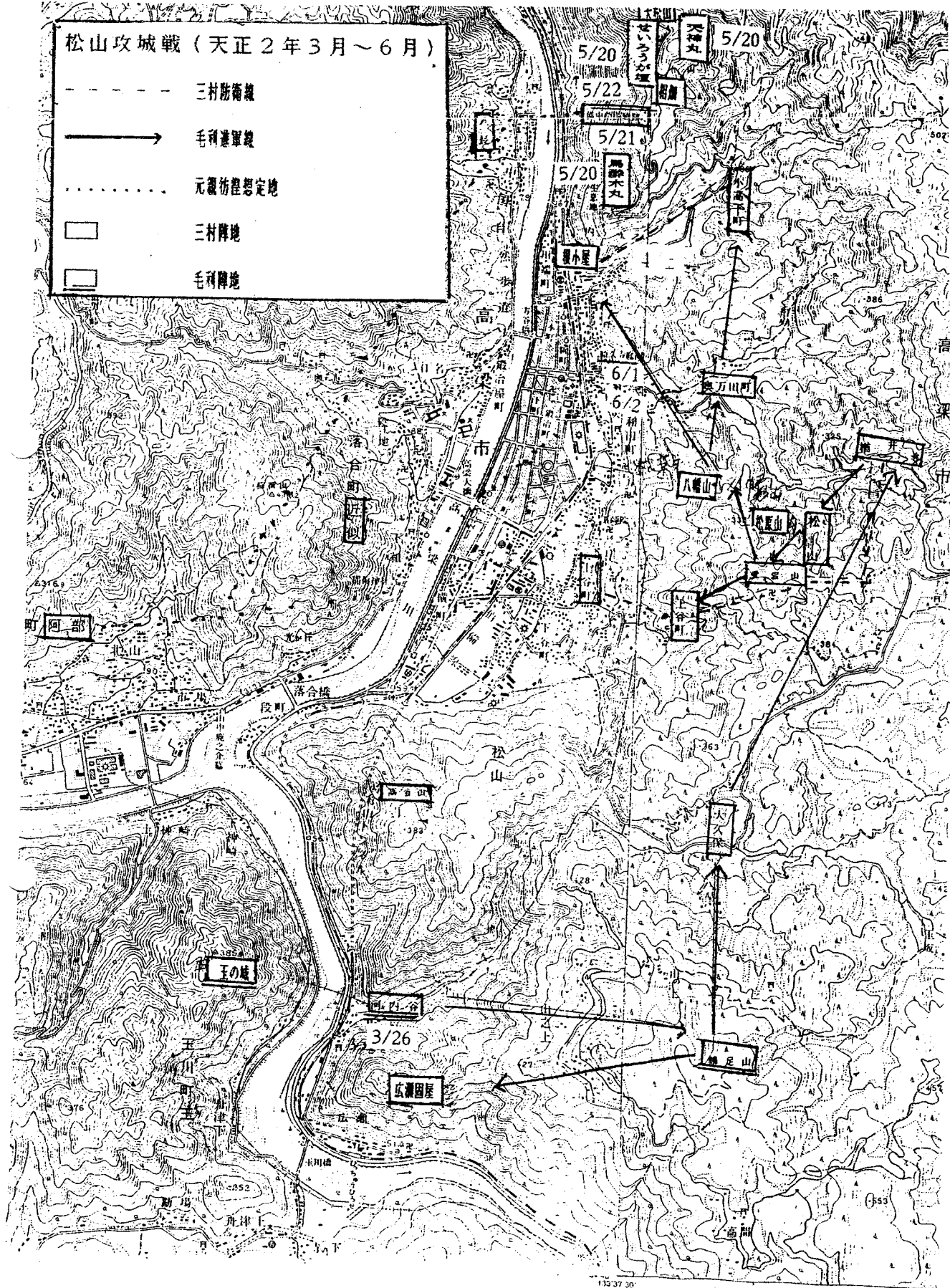
☆上月城の合戦(天正6年=1578)をめぐる歴史の流れ(毛利、宇喜田、羽柴のからみ)△山中鹿之介の謀殺(7月)△直家の離反(天正7年10月)

△高松城の水攻め(天正10年=1582)

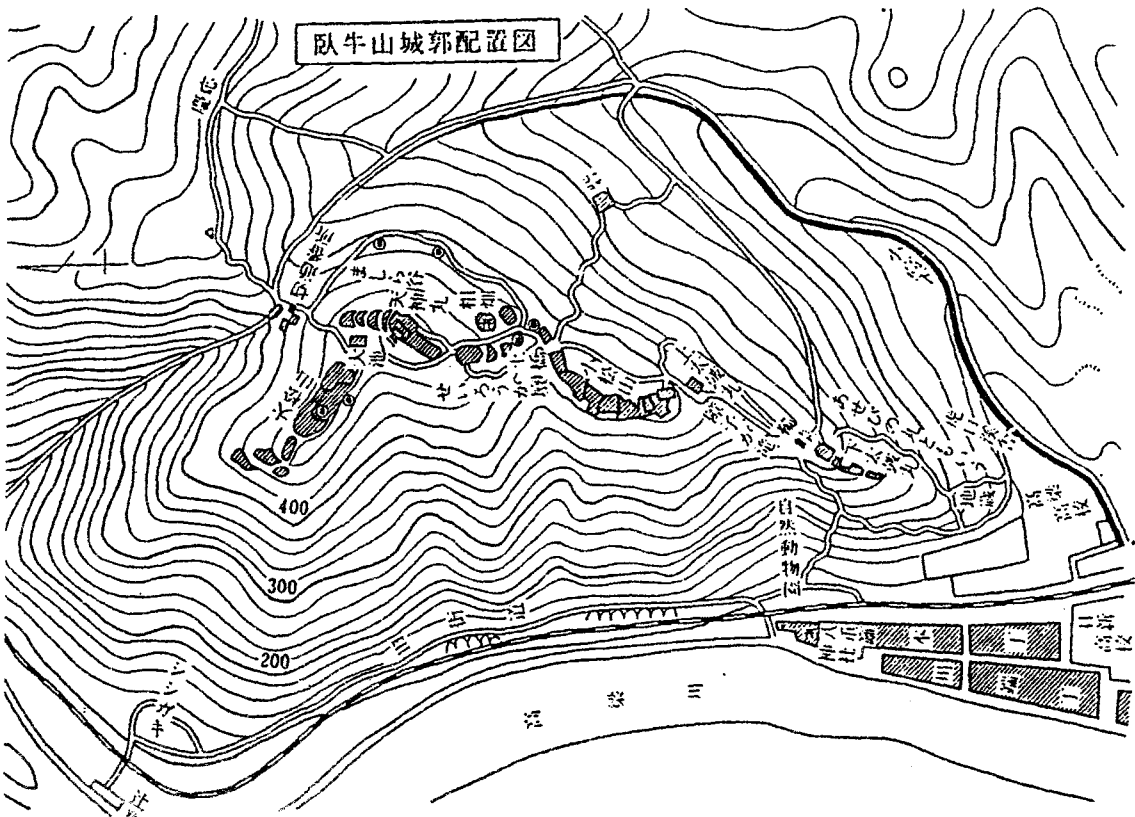
☆高松講和後の松山城〔天正12年冬松山城を確保し、慶長5年に至る〕

松山攻城戦（天正2年3月～6月）

- 三村防衛線
- 毛利進軍線
- 元義経推定地
- 三村陣地
- ▣ 毛利陣地



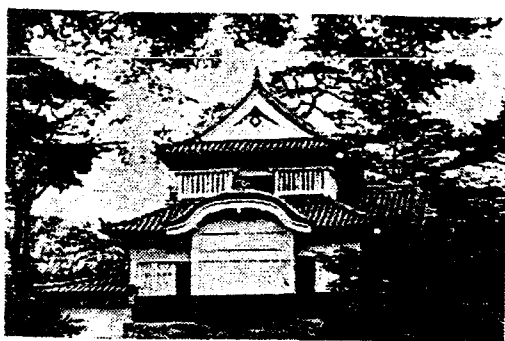
期 間	年 數	城 主	附 屬	城 地
自延応二年 至元弘？	約九十二年間	秋庭 三郎重信 又四郎信村 平六重連 小三郎義繼 三郎重知	北條氏	大松山に築城
自元弘元？ 至正平十年	約二十五年間	高橋 九郎左衛門 又四郎範時 大九郎	北條氏	小松山に擴張

[illegible]

一、備中松山城（建造物）

備中松山城の城地の変遷は備中松山城跡で述べる。

現存の建造物としては三重櫓（天守）二重隅櫓の二棟と土塀の一部である。天和元年（一六八一）に藩主水谷勝宗が改築に着手、同三年に完成した。縄張は畑角兵衛、作事奉行永島万九郎、小薬師万助・大工頭玉木喜左衛門であった。建物は塗込土蔵造のいわゆる近世式城廓建築に改められた



が、城地は元弘元年（一一三二）に備中守護職高橋九郎左衛門が初めて築城した小松山城の縄張を殆どそのまま用いている。したがって平城にあるような地形が無く、馬走りや武者走り等もない。土塀代りに木櫓がかなり使われたりして、中世の面影を随所に止めていている。

天守閣もこの松山城では三重櫓と呼ばれ、外観は三重で実際は二階建である。

初層には罫炉裡があり、装束の間という城主だけが入る一段高い別棟の部屋がある。二層目正面には御社壇を設けて三

振の宝剣（別掲松山城宝剣参照）を御神体として祀っていた。全体に窓は大きく且つ数も多くて城内も極めて明るい。総して居館と言った感じで、これまた中世的機能を保っている。もとこの天守は、第八櫓から渡櫓を迎っている連廊式であったが、昭和十五年に当時の永井恒三郎町長による大修理の際に、荒廃がひどく原型の復帰が困難なため、やむなく切離したもので、往昔の姿とはやや相違している。

天守の裏の二重櫓は、天守と共に本丸を構成する重要な建物で、昭和三年に有志の献金によって修理、昭和三十四年の国による解体修理で完全に原状に帰ってきた。

残存の土塀は、土を練り煉瓦状のものを積み重ね、白壁仕上げにしたものである。そこにある矩形の孔を矢狹間、円形のものを筒狹間といい、機

口頼久寺

頼久寺は現に高梁町頼久寺町にある疎利で、江州永源寺派に属して居る。もとは天忠寺又は大林寺といひ、後備中の安國寺となつた。備中集政志に依れば、安國寺の開基は寂室和尚である。この寂室の傳には見えぬけれども、寂室は久しく備作の間に居り、備前安國寺にも住したることがあるから、この國安國寺の開山たりしことは必ず有り得べきことであると、辻博士もいつて居らるゝ。現にその生前の畫像が傳つて居る。後明師もなく英増もなく、漸く頽廢して鎌幕の盛となつて居たものを、頼久が畫塔を造らし寺田を寄附して再興したので、これより頼久寺と呼ぶやうになつた。同寺由來記に「千時上野備前頼久寺外護香山原因師起重恩之志方丈門無等凡釋利所宜者成慈覺彌足矣遂以天忠名山號以頼久號寺基寺宇大舊塔腹田若干充婦弟之資云々」とある。その後三村滅亡の際兵火に罹つたが、殿堂は後に毛利氏に依つて再建せられた。慶長年間小堀一政來任するや當寺をその居館とした。今の庭園は其子政一（遠州）の造つたものである。小堀公の跡地に依りて御朱印地二十石を賜り、爾後徳川時代を通じてこれに依つて維持せられた。思ふに斯の如き由緒を持ち、且つ殿堂に關係ある縣下の寺々が殆ど他宗となつて居るのに拘らず、この寺のみ其流を斷つて居ることは最も意義あることとして、此の意味に於ても地方種に見る名刹である。

山中鹿之介幸盛終焉の地

山中鹿介は備前上月城落城により降伏し、毛利輝元の本陣備中松山城に護送の途中、此処高梁市落合町阿部に有ったと云われる「阿井の渡し」で天正6年7月17日(10日と伝う)天野元秋の配下、福岡彦右衛門元明により討たれたと伝わる。山中鹿介に就いては、昔から数々の出版物等で広く知られている所です。又、竊に鹿介の首塚が現存する等、備後とも関わり有る戦国武将の一人で、天文14年8月15日出雲富田月山城北麓新宮谷で父三河守満幸母立原佐渡守綱重の女「なみ」との次男として生まれ34才で討たれる迄、苦難の連続であり波乱万丈の生涯であったと伝わる。

山中鹿介

存孤杵臼何忘趙
嶽々驍名唯喚鹿

頼山陽

乞救包胥暫託晋
虎狼世界見麒麟

殺レ所輝山 ス久
サ等ニ元中 事切
ルイ送ノ幸 慮
ナラ津盛

リ上ニ北諸上荒羽成上元ニ豊率信フ爾毛頼義
尼月陣高ト月木築ム月春入上人長 氏利ニ昭
子城ス倉シ城村秀 城隆ル 月ヲ尼 相繼移
勝堀 山テ後重吉 フ景 城播子 駄田リ後

一五一 山縣長茂覺書

覺

一 公方義昭様信、長公御半御不和之儀出來、公方様至備後國鞆津被移御座ニ付而、京藝御弓矢御引分被成之事、

一 幡州高月城ニ、自信長公爲西國手死、尼子罕人被籠置之事、

一 天正六年^{寅戌}元春様、隆景様御領國中南北諸軍勢、被打出、高月城御取巻候、自信長公爲後卷、羽柴筑前守殿、荒木攝津守、高月北高倉山ニ打上御

對陣候、雖然、藝易方猛勢ニ付而、弥不被及行、京勢敗軍候、其後高月城山中鹿助以扱、尼子勝久公、同助四郎殿、神西三郎左衛門切腹候、此外日野

屋形、立花源太兵衛、山中鹿助已下悉下城被仰付、藝州成御勝利之事、

一 山中鹿助毛利殿御被官ニ望ニ付、輝元様御座所備中松山へ被送着、天野元明ニ被仰付、あいの渡よて被討果之事、

山中鹿之介墓 高梁市落合町阿部

市場にある。山中鹿之介(鹿之助)は尼子氏の重臣で名は幸盛。天文一四年(一五四五)出雲田月山城(現鳥取県出雲市)の城下で生れた。尼子晴久・勝久に仕えて武殿をたて、英雄豪傑とうたわれたが、主家は大内氏、のち毛利氏との中国争覇戦に敗れて衰退、再興をかけた天正六年(一五七八)の播州上月城(現兵庫県佐用郡上月町)の戦いにも敗れ、勝久は自害した。鹿之介は毛利氏に降伏し再起を期したが、毛利輝元の本陣松山城へ護送される途中、同年七月一〇日、帰順の意を疑われて阿井の渡で討取られた。山県長茂覚書(石見吉川家文書)に「山中鹿助毛利殿御被官ニと望ニ付、輝元様御座所備中松山へ被送着、天野元明ニ被仰付、あいの渡にて被討果」とあり、討果した福岡氏の合戦覚書(安藤閣藏)はそのときの様子を詳しく書残している(阿部村)。

遺骸は当地観音寺の住職によって葬られ、覆を植えてその目印としたが、洪水のために流失した。このため正徳三年松山藩土前田時棟が足輕佐々木郡六とともに「山中鹿之介墓」と刻んだ石碑を建てた(西平次郎覚書)。高梁市史。石碑の総高約二・二メートル、さらにその下に基礎の割石(高さ約一メートル)があるが、これは明治一六年(一八八三)に阿部村と玉村のうら神崎の有志が建立したもの。

山中幸盛
當世ノは
ヤリ物ヲ
仕ル
三木
以心傳心
ノミ

八三 吉川元長自筆書狀

○コノ文書ハ、天正六年五月或ハ六月ノモノナラン、

歸陣之儀ハ難計候間、きといの御あてうい有間敷候、

先度者兩通之細書、具令披見候、

一彼尊返細碎雖申度候、餘事紛候間、乍存不具候事、口惜存計候、

一上月一途之分候間、先以可然候、少不足儀候、其段拙身式申候て、存候て

も不入候、

一(山中幸盛)鹿介當世のはやり物を仕候、只今こそ正眞之天下無双ニ候、無申事候、

一三木邊之儀肝要之事候間、先爰元頓如此之次第候、

一以前々申候伊物哥返候ニて候、遂面談候ハ、其節少ハ可散候歟、唯以

心傳心ニ候、教外別傳のこの事ニ候、目出度やクテ歸陣可仕候間、仏法

世法長久可申承候、吉祥、恐惶、

(腰紙切封ハ書)

播磨草庵

(周伯惠稿) 雍老禪尊前

吟窓下

默然齋

2 就此表任存分、爲御祝儀太刀一腰青銅百足被懸御意候、
誠御丁寧之至本望に存候、山中事今日至松山指下候、無
殘隙明候条可御心安候、將又此節御所勞氣之由候、無御
心元存候、御養生肝要候、委細元余の申候、恐、謹言
(幸四) (同中) (通四)

(天正二)
七月十日

隆景 御判

(豊後)
檜崎三河守殿 御返報

3 就大田祝言之儀、御方御半之事申候處、御分別所仰候、
然者御存分等承候条之趣、口羽刑部大輔速申整候、可
御心安候、猶岡伯可被申候、恐、謹言
(毛利孝包) (通四) (元吉二)

七月十日

元就 御判

(遠江)
檜崎彦左衛門尉殿 御陳所

抑く山中鹿助幸盛、本は池田甚次郎と号して、尼子家十
人の家老に列すと雖も、食地も微少に座敷の次第も末也し、
然に幸盛父には幼少にして離れ、一人の母に養育せられて
成長す。

彼か母は崔元暉、呂宋公の母にも不、劣賢女にて有けれ
は、如何にもして鹿助を世に在らせんとのみ、明暮に心を
碎き、親うち具し、世の覚え花麗なる朋輩にも劣らずもて
なしけれと、果敢々々數々後見しなければ、事有時は猶よ
り所なく心細氣也、元來顔氏、原氏にも超えて貧しく経けれ
ば、万の事の妨と成行けるこそ佗しけれ、彼の母自時々

後園を鋤いて麻を種、初是刈、是刈て、治めて以て續留め、
絡梁簾などに移し、南窓機杆の勞をへて布に作り、布子と
云物に調じて、茜の裏を付、其數多く鹿助に与へ、自は
百結碧鮮の垢衣を衣たり。

鹿助本才賢なる男也ければ、尼子家に近習の者として、
三百人許有けるか、皆人の二男三男共にて、何れも貧しく
十年不製衣、懸褌の衣不蓋形者共なれば、常に交會の
時、彼布子を与ふるとは不云、唯自然に渠等か衣裳に著
替、或時は朋達共五人十人招集て、吾屋に宿せしめ、
朝夕の饗をものしける故、人皆其志を感し、何となく鹿
助か手に付て、爰にては山中か手の某と名乗、彼所にて
は鹿助か手の何かしと名乗ける間、其名敵陳に掲焉く、
武威諸人の上に在けり。

此して年を逐月を迎へて、勇智の実徳積果し、仁義の
道も如形兼行ひけるに依て、衆人懷き従ひけり、永祿に
富田城落去して後は、勝久を大将と仰たりけれ共、万事
の成敗幸盛か胸裏より出て、數箇年か間、山陰山陽の兩道
に武威を振ひ、以寡勝衆不違、勝計一さる故其名天

彦右衛門元明、於諸所達忠節候願、梓彦三郎幼年ニ付、申聞候様可有御座哉難計存、天正拾四年之春以自筆書付置候、御感狀被下置たるにて可有御座候得共致紛失候哉、唯今所持不仕候、家ニ儘ニ申傳候儀者、書付可差上之由ニ付、元明自身調置候段紛無御座候ニ付、左書付指上申候

24

一中之村之城ニ敵壹人討申候、其時手貳ヶ所負申候事

一嶋根白鹿之城被成御取詰候時、らんとこの尾より仕寄

穴を御堀せ被成候、敵もまた多賀丸より横穴をほり候

て防ぎ候、互ニ堀寄敵の横穴に行相、穴の内へ敵出合

候あせり合御座候時、先立て來かせき候敵の内、身白

大藏と申者を討て首をとり申候、其勢に敵の横穴を此

方に取、敵を悉追込、穴之内のせり台御利運ニ相成申

候事

一白方にて原左助と申者被仰付候時、取籠相働候時、一

番ニ仕込左助を討申候事

一雲州島根ニ御在陣之時、湯之津之者被仰付候時、兩人

討申候事

一九州立華之城被成御取詰候時、松尾白籠筋の一番ニ仕

寄を付申候、其時手を負申候事

一大内太郎左衛門輝弘富海の打石ニ切腹仕候時、山口

よりの追手之衆大勢山へ取上り候、一番ニ追懸、山へ

上り早ニ追付申候、證據に輝弘頸を取申候事

一秋穂にて兩度之せり合に敵貳人討、頸ニツ取申候事

一手之城にて頸一ツ取申候事

一大坂川口にて敵之番船被成御切取候時、船中にてのせ

り合に敵船へ取乗、敵一人討頸取申候事

一泉州大津の浦へ御働之時、敵壹人討て頸取申候事

一備後之三郎坂と云所にて、人三人被仰付候、壹人も不

洩討申候事

一山中鹿介をあいの渡りにて被仰付候時、鹿介淺手を負

川中へ飛込、向之地へ取渡り可申鉢ニ相見へ候時、一

番に川へ追付飛込、川中にてく候て鹿介頸取申候事

以上

清和源氏山名一族、從是以前續不相知

福間三郎義直(或貞直)

福間備前守貞平(三郎)

福間備中守源明(彦三郎)

福間雅樂頭秀貞(求馬 右京亮)

山中家系圖部集、出雲富田城史より

宇多大皇 — 敦実親王 — 雅信 — 扶義 — 經賴 — 章經 — 高經 — 高信 — 經方 — 經方之始 — 秀定 — 秀義 — 定綱

信綱 — 氏信 — 滿信(遠) — 宗氏(遠) — 高氏(遠) — 高氏之始 — 高秀 — 高久(尼子の始祖)

詮久(羽江)

持久(羽江)

清定

經久

女

女

女

女

女

女

女

女

女

義勝

政久

清久

千歳

元知

就易

就易

就易

就易

就易

定久

清久

氏久

義久

元知

就易

就易

就易

就易

国久

清久

氏久

義久

元知

就易

就易

就易

就易

女

女

女

女

女

女

女

女

女

興久

清久

氏久

義久

元知

就易

就易

就易

就易

女

女

女

女

女

女

女

女

女

女

女

女

女

女

女

女

女

女

女

女

女

女

女

女

女

女

女

女

女

女

女

女

女

女

女

女

女

女

女

女

女

女

女

女

女

女

女

女

女

女

女

女

女

女

女

女

女

女

女

女

女

女

女

女

女

女

女

女

女

女

女

女

女

女

女

女

女

女

女

女

女

女

女

女

女

女

女

女

女

女

女

女

女

女

女

女

女

女

女

女

女

女

女

女

女

女

女

女

女

女

女

女

女

女

女

女

女

註、義兼の妻二子を生む、長子を常祐又頼重と云い、孫右衛門と称う、母の姓を継ぎ山中氏と改める。代々安芸草津に住するが、後五日市に移る。次子を孫兵衛(幸元)と称す、備前岡山に居り後大阪に移る、鴻池の祖也。

替のとき也、ほんの太き也、但は、式寸五、六分、長さ式尺三寸、四寸つゝ、此小敷合五千七百枚也」「なこのそき六拾束、此小敷合参万枚也」とあるところをみると、書院の屋根は柿葺であつたようであるが、その規模などについては不明である。

御根小屋の建物は廃藩置県後の明治六年（一八七三）に取壊され、同二八年になつて跡地に県立高梁中学校現高梁高等学校が建てられ現在に至つてゐるが、石垣はほぼ当時のまま残つてゐる。

松連寺

●高梁市上谷町

愛宕山西麓にある。東向山と号し、本尊大日如来、真言宗御室派。本堂には本尊のほか十一面観音を祀り、備中順礼第三番札所（寛政二年「備中順礼略記」）。

もと奥灘（現奥万田町）にあり、弘仁年中（八一〇―八二四）弘法大師開基と伝え、永祿五年（一五六三）讃岐の僧有範が再興、松山城主三村家親が野山村現上房郡賀陽町を寺領に寄進した（元禄三年「松連寺縁起」寺蔵）。天正三年（一五七五）備中兵乱で松山城が落ち、城主三村元親はひそかに阿部山（現高梁町阿部）に逃れたが、六月二日に当寺へ来て毛利方の薬屋与惣右衛門等に検使を請い、「人といふ名を借る程や末の露消てそ帰るものとぞの誓に」という辞世をのこして切腹したという（中国兵乱記。文禄元年（一五九三）文禄の役にあたり当寺住持有海は総督宇喜多秀家の御座船に乗船、十一面観音の秘法を修して戦勝を祈つた。役後、有海は御座船の御座所の天井と船戸を拝領し、本堂を再建した（前掲縁起）。この天井と船戸は今も本堂の天井・扉として使用されており、県指定重要文化財。明暦三年（一六五七）に現在地に移転、その後松山藩主水谷勝宗・同勝美は寺領若干を寄進、法門は繁栄し、本堂を再建、山門を建立して高さ八尺の金剛力士像を安置した。寛文一二年（一六七二）京都仁和寺性承法親王が当寺の来由を聞きその門葉に加え、同寺末となつた（前掲縁起）。万治年中（一六五八―一六八六）に奥灘旧寺跡での村民が耕作中に阿字および空海二字の書かれた石一枚を発見したと伝え（前掲縁起）、弘法大師開基の伝承はこれによるもの、ようである。

八重蔵神社

●高梁市内山下

臥牛山西麓に鎮座する。祭神は松山藩主板倉家の初代板倉勝重・二代板倉重宗の二柱。旧県社。寛政五年（一七九三）藩主板倉勝政が勝重の霊を奉祀し、城内の馬場に社殿を営んだのが創建。文政一三年（一八三〇）本丁北端の現在地に社殿を再建、遷座した。祭日は勝重の命日である四月二十九日と十一月七日で、藩主も在藩中であれば必ず参拝していた。宵祭と当日には雅楽が奏されておと、家老・年寄は本殿の階上縁側、番頭および「伊賀浪佐」として御初代より召出され候家筋の者」は格縁にかかわらず階下まで進んで拝礼、旗奉行以下取次役までは上段の末席、給人以下は拝殿で拝礼、組外以下は拝殿縁側で拝礼していた（香夢一畝。明治一八年（一八八五）郷社に昇格した際、重宗の霊を合祀した。南に御根小屋と坂下町、西は松山川（現高梁川）に臨む八三一坪の境内には、本殿・拝殿・幣殿・隨身門が配置され、旧時の姿で現存している。

幕末の藩主板倉勝政は御根小屋の東側にあった茶屋の一面に明農園とよぶ農園を設けて自ら耕作し、農民の労苦を忍ぶとともに、その傍らに小亭を設けて農耕の神を祀っていたが、明治六年御根小屋・茶屋の建物が撤去されることになったとき、山田方谷がこの小亭を松山川対岸の近似村天台宗蓮華寺境内に移して臥牛亭と名付けた（臥牛亭碑銘。現在の社務所はこの臥牛亭を移築したもので、御根小屋・茶屋にあった建物のうち現存する唯一のもの。宝物となつてゐる「藤の桐太鼓」はもと御根小屋正門右手の太鼓の間に常置されていた時報用の太鼓であつた。

しょうれんじほんどうてんじょうとふなど 松連寺本堂天井と船戸

1959年（昭和34）岡山県指定重要文化財。松連寺は高梁市街地の東南山麓にあり、松山城郭形成における寺町の一角を占めている。豊臣秀吉の朝鮮出兵に総帥となつた宇喜多秀家が、祈禱僧として同行したこの寺の有海の関係もあり、後に秀家の乗船した安宅形御座船の格天井と船戸を寄進した。天井は中央16個を欠くが、他は金箔押の中央に五七桐が描かれ、桃山時代の特色をよくみせている。船戸2枚は、本堂正面右側に1枚、庫裏から本堂に渡る扉に1枚が利用されている。



松連寺本堂天井（左）と船戸（右）

たかはしきょうとしりょうかん 高梁市郷土資料館

高梁市向町にある歴史・民俗資料館。1904年（明治37）建築の洋風のもと高梁北小学校本館（市重要文化財）を活用し、1978年（昭和53）4月開館。江戸末期から昭和初年ごろにかけて使用されていた農耕具、機織り機、酒造り用具、山鴛籠、高瀬舟の諸用具など市民有志が収集した郷土色豊かな歴史・民俗資料2000点余りと、松山城に関する古文書や城の復元図も展示している。また農家の囲炉裏端と商家の店先も復元し、往時の面影がしのばれる。

／高野 葵

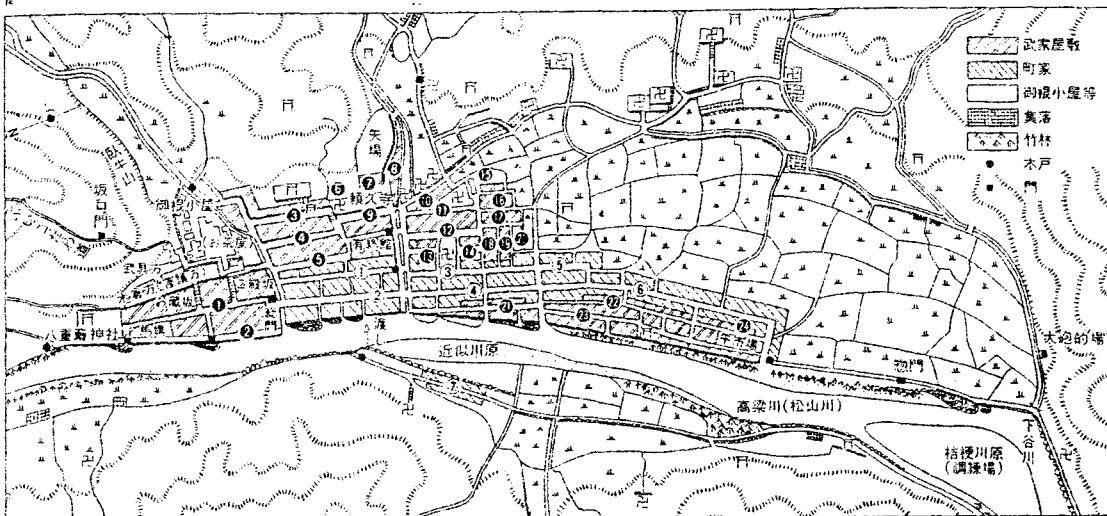


高梁市郷土資料館

でも31であった。町割りには、高梁川に防禦用の堀の機能をもたせ、東側の山麓に防備を兼ねた寺院を多く配し、その間に御根小屋との距離、地形を考慮しながら南北に細長く市街を建設した。幹線道路は、御根小屋の総門付近から、本町、下町、南町を通り、途中で湾曲させ、これに並行して新町、鍛冶町、東町を配したが、これら町人町は藩の経済を動かす中心であった。侍屋敷は町人町をとり囲むように、また、禄高や身分の高い者ほど御根小屋近くに、軽輩の者ほど周辺に配置されている。近くは重臣や中堅武士の住む川端丁、*石火矢丁、御前丁などであり、遠くに職人町の鉄砲丁、弓之丁などを

たかはしきょうかまち 高梁城下町

備中松山城は臥牛山に築造された山城で、その山麓に城下町が形成された。毛利・三村氏の攻防をはじめ幾多の戦乱の末、徳川時代を迎えた。1600年（慶長5）*小堀正次*が代官となり、城は荒廃していたので*頼久寺*を居所とした。2代目*小堀遠州*（政一）は、城の修理と城下町の建設を行った。その後、*水谷勝宗*によって城の修築は完成し、城の南麓に居館兼政庁として御根小屋が造られ、城は御山城と呼ばれ、往時の姿の一部を現代に伝えている。また、町人町も建設され、城下町は小堀政一から水谷勝宗に至る約70年間に大体完成した。このころ（1686年＝貞享3）町数は22であり、幕末期におい



①本町 ②石火矢丁 ③上之丁 ④寺町 ⑤大工丁 ⑥中間之丁 ⑦甲賀丁 ⑧弓之丁 ⑨新町 ⑩下町 ⑪鍛冶屋町（注）武家屋敷は丁、町家は町と区分していたが、江戸中期ごろから混用された。泉順遠図

西之坊 （成羽町成羽・古町）

放光山と号し、真言宗大覚寺派、もと持澤寺（現小田郡矢掛町末。安養密院常樂寺とも号する。本尊は阿弥陀如来、両脇侍に観音・勢至がある。開創は不明であるが、当寺に対し付近に東遊山東之坊が存在したという伝承がある。寺伝によると天文二年（一五三三）三村家親が当地へ進出、居館のお茶屋築造の際、当寺に本陣を置いたという。元和元年（一六一五）先有により中興され、のちに旗本山崎氏の祈願所となった。寛政二年（一七九〇）の御殿行事として当寺で護摩祈禱が行われた成羽史話。現在の護摩堂は天保四年（一八三三）の再建。本堂の格天井には種々の薬用草木が描写され、またマリア観音像も伝えられ注目される。

三村氏居館跡 （成羽町成羽・古町）

三村家親が天文（一五三二）五五の頃鶴首城対岸の平地中央部に構築した居館、別名お茶屋。居館域は東西約一九〇メートル・南北一七〇メートルの長方形で、南東に突出部がある。四囲には土塁・周濠を備える。東端の水田中、老樹の立つ盛土は外郭の位置を示し、また南北方向にある低位の水田幅一七・五メートル、深さ約二メートルは堀の遺構と推察される。伝承によると、北側と南西側には周濠の取水口が設置され、北側の取水口は島木川から引水したという。のち元和三年（一六一七）に因幡国若桜（現鳥取県八頭郡若桜町）から入封した山崎家治は、寛永一五年（一六三八）の肥後富岡転封までここを居館とし、また万治元年（一六五八）当地に入部した家治の次男豊治は、対岸に豪壮な御殿と陣屋町を建設したが、当所を別邸お茶屋として種々の宴を催したという（成羽史話。現在居館跡の

成羽藩陣屋跡 （成羽町下原）

鶴首山北麓に築営された山崎氏の居館跡。御殿・御館とよばれた。寛永一六年（一六三九）常陸国下館（現茨城県下館市）から成羽藩五万石の領主として入封した水谷勝隆が、陣屋の築造と陣屋町建設に着手したが、同一九年松山藩へ移封となった。その後、万治元年（一六五八）当地に入部した山崎豊治は、水谷氏の事業を継承し本格的な陣屋および陣屋町の整備を完遂する。大手門跡を中心に東西の石垣の築造法に差異が確認され、両者によって工事が継続されたことが知られる。陣屋絵図は残存しないが、現状の遺構の規模は東西幅約二七・六メートル・南北最大幅約九〇メートルの長方形の台地をなす。周囲には堅固な石垣（最大高三・九メートル）が築かれ、陣屋裏の鶴首山麓には幅三・九メートルに及ぶ深堀がある。正面東より作事門・大手門・庫門の三門を配し、敷地内は各々作事場・書院・倉庫の三区に整備されていた（享保年間「町絵図」成羽史話。現在東から運動場・町役場・成羽小学校となっている。庫門跡（現小学校正門）から西側の石垣上の土堀内部には幅一・八メートルの武者走の遺構が明確に残存する。西端外苑の蓮池は、江戸時代末期頃の作庭と考えられる回遊式庭園。

成羽藩は元和三年（一六一七）に山崎家治が因幡国若桜

（現鳥取県八頭郡若桜町）から約二万六千五〇〇石で入封し成立。寛永一五年家治が肥後富岡へ移封となり、翌一六年常陸国下館より水谷勝隆が五万石で入封。勝隆は同一九

年に松山に転封となり、万治元年もと藩主山崎家治の次男豊治が旗本交代寄合懸五千石として入部した。以降一〇代義柄で幕末に至る。弘化四年（一八四七）の分限帳山崎文書では、給人（給米一〇〇一三〇石九・給人格（三二二五石八・中小姓（二八二〇石）一六・供小姓（二六・一八石）一四・徒士（二〇一六石二六・茶道（二〇一四石）一〇・不断（九一・二石）五・鉄砲（七・九石）一八・足輕（五十一〇石）三三・手廻格（二・六石一四石）一三など家臣一五二人を

